



横浜陶芸友の会だより

第 169 号
平成 29 年
11 月 1 日発行

『第 39 回 作品展』のお知らせ

『作品展』の会場は昨年度と同じ JR 東神奈川駅に隣接する「かなつくホール」です。申し込み方法と作品展の詳細については、会報の 11 月号と一緒に会員の皆様に送付いたしました。

※今年度は高橋会長の肝いりで

「作品の制作等についての発表会」を

①土曜日 16 時から、②日曜日 15 時から予定しております。お楽しみに。

【会期】平成 30 年 1 月 16 日（火）～ 21 日（日）

【会場】かなつくホール A 室

（JR 東神奈川駅 下車 3 分）

【特設コーナー】「ぐい飲み」

【申し込み締切り】平成 30 年 1 月 9 日（火）

【懇親会】1 月 20 日（土）17 時から

事業部

※搬入時の集合時間が変更になりました。30 分遅らせて 9 時半からの会場準備です。

役員会の報告

総務部より

8 月 26 日（土）15 時 30 分より

会長・副会長・各役員 8 名で話し合いました。

○事業部 「第 39 回作品展」について

会場・日程が決まりました。

○専修部 秋期焼成会（織部製作）

○広報部 「7 月友の会たより」発行

「11 月友の会たより」発行予定

○総務部 名簿作成・友の会たより発行

○会計部 会計部員を募集中

※「第 40 回記念作品展」（平成 31 年 1 月予定）

について検討いたしました。

・作陶に打ち込むのには、とてもよい季節となりました。「作品展」で皆様とユニークな作品に出会える事を楽しみにしております。

《次回 役員会》

日時：平成 29 年 11 月 18 日（土）15 時 30 分～

場所：杉田地区センター 集会室 A

※15 時より、部長会を行います。

「専修部秋期焼成会」を終えて

井上 明

近年、毎年テーマを決めて焼成会を行ってききましたが、今年は「型おこし」による織部製作になりました。型が少ないと一同に製作できないと事前に（3 月）部員にて石膏型を製作し準備しての焼成会となりました。

織部の独特な形状、絵柄をこの機会に勉強し「オリベイズム」を体験できたらと思います。

《日程と主な内容》

○8 月 27 日（日）織部製作

9..00 よりそれぞれが思い思いの型を使い談笑しながら製作に取り掛かる。事前に型は用意できていたので、待つ人はなく、その後無心に・・・（写真①）



○9 月 3 日（日）作品受付

○9 月 10 日（日）釉掛け

・織部の独特な絵柄図（本橋さん提供）を参考に鬼板と弁柄の 2 種類で絵を書き織部用透明釉と織部釉との掛け分け。

・ 絵具の濃度、掛け分けが意外と難しい。

(写真②)



○ 9 月 17 日 (日) 引渡し、懇親会

・ 完成作品 (写真②) を見ながら製作の反省
やら工夫をしばし歓談。これが一番勉強に
なり楽しい時間でもある。

・ その後出き上がった器に持ち寄った料理を
盛り付け、懇親会では話はつきない。(写真③)

(写真③)



織部焼は、千利休の弟子であった武將茶人・
古田織部によって始められたと言われていま
す。その特徴は斬新さにあり、あえて歪な形
状を施し、市松模様や幾何学模様といった大
胆な文様を施す趣向は、それまでの整然とし
た茶器とは大きく異なり日本特有の文化であ
るといわれていることは皆様よくご存じだと

思います。そんな織部の一端を垣間見れた
焼成会になったと思います。
お疲れ様でした。

来年度の予告



来年は「飛びかな」
を予定しています

『第 38 回 作品展』③

前号に引き続き「作品展」の紹介です。



貝森俊司さん

○ 今回の作品は、身延の穴窯で焼成したもの
だけです。初めての試みとして強還元をかけ
るというので、古信楽の赤 7 号や荒目など土
を変えてみました。

その色の違いが今回の作品に出ています。
・ 花器が多いのは、奥様がお花を習っていて
自分が作った花器に花を生けるためです。



鈴木和子さん

○ 焼締めは、いつもだと
沼津の穴窯ですが、今年は
身延の穴窯で焼きました。

1150 度から 1300 度で酸化・還元
を 3 回繰り返し、一番前の
棚に灰が作るクモの巣ができ、
みんなで見て感動し、おもしろかった。

・ 織部は自分の窯で焼いたが、焼きが足りず
溶けていないので、もう一度釉をかけて焼く
予定。釉薬に接着剤を百分の一入れると二度
目でも綺麗に焼けます。

・ 本物の葉を写した皿は電気で焼いたのだが
使い込んだ棚板の裏についていた物が反応し
たものか、思ったより綺麗に焼きました。

・ 緑色の皿は、10 年前に買った「氷裂紋青磁」
だと思ってかけたなら、全然違う物になった。
・ 焼締めの壺は今年流行りの「六文銭」をま
ねたもの。「何にも無いと、ちよつと淋しいか
な？」と、思ってたくつつけてみました。





吉川 勝さん



○今回の作品は「森の中」をイメージしています。フクロウ、イノシシ、沢ガニなど。可愛いでしょう。昔、灯油窯で焼きました。練り込みの薔薇は、土に色粉を10%20%と入れ8枚組み合わせてグラデーショナルを作り出す。それを重ねて花を作るのですが、粘土はいいのですが磁器土は切れないから割れやすく、とても難しいです。



鈴木早苗さん



○今回の登り窯の作品は、お香を入れて煙突から煙を出す予定でしたが「会場ではまずいでしよう」ということで、家で楽しむことになりました。

・コーヒー缶の作品は、紙に缶の模様の絵を描き、切り抜いて土台の丸い缶に貼り付け、そこに粘土を盛り付けて描きました。



本橋昭彦さん



○焼成は、沼津や身延の穴窯でやっています。仲間10人位が3〜4チーム交代で90時間近く焼いています。

昔の会社の陶芸部の窯で素焼きし、本焼きを穴窯で行っています。

・この壺は火前の灰被りの場所で炭化しないように

・朱泥の急須は山田常山さんの本で研究しながら作りまし

ます。蓋は少し大きめに作り、削りながら合わせます。茶こしが一番めんどくさい。



鈴木貴久さん



○この皿の青色は、呉須を溶いてドブんと潰ければ流れて簡単かと思ったら、かえってムラが出てしまう。これは筆で塗ったのでこの方がムラが出ない。

白化粧の皿は、生のうちに線や模様を描き裏には飛びカンナを施しました。



石川光子さん



おちびちゃん と おしぼり皿

○今回の作品は、仲間と沼津の穴窯で焼いたものと、電気窯で焼いたものです。

・「おちびちゃん（お地藏様）」は平成10年頃

から作っていて 300 体位あります。
今、頼まれていて腕をけがしてから、
この 2 年作っていません。

この「おちびちゃん」達は熱いのに耐えて
私と一緒に頑張ってきました。

・この碇の作品は、おしぼり皿です。

「これ何だろう？」って、皆さんわからない
かもしれませんが、私はハマツ子なので横浜
のイメージで私流のアイデアで作りました。



中野正好さん



日展入選作品

○宇宙を飛んでいる卵をイメージして作品を
作っています。卵が好きなんです。

今回の「コスモストーン」は日展に入選し
ました。



鍋島弘義さん



○お腹の大きな「布袋さん」。
誰かを思い出しませんか？



吉良 謙さん

○この「一輪ざし」は奥様が
成形されて残されていた物に
白マットを掛け、炭化焼成で
完成させた作品だそうです。



川島幸子さん



○この「鉢カバー」は、撚り紐が細かったの
で折れると思っていたら、無事焼きあがった
作品です。



山口泰子さん



○長皿は専修部の焼成会に参加して出来た
粉引きの作品です。

今年も干支の「鶏」を作りました。



☆ここから先の方達には、今回お話を伺えず、
大変申し訳ありませんでした。

次回の紹介では率先して記事に載せたいと
思います。



高橋光男さん



『作品名』

・湯呑(夢・智・寿)

・歪み猪口(白化粧 御本)

※呑む箇所により味が異なります



大日方 毅さん



『作品名』黒の器と煎茶の器

・鉢・中皿・徳利

・ぐい飲み・湯呑



須藤芳弘さん

- 『作品名』
- ・大皿
- ・花器
- ・カップ
- ・ぐい飲み

- 『作品名』
- ・大皿
- ・中皿
- ・花器
- ・時計
- ・湯呑



徳植美和恵さん



- 『作品名』
- ・長皿
- ・中皿
- ・小皿
- ・花器
- ・お茶碗
- ・湯呑
- ・銚子
- ・下駄
- ・靴



牛田茂子さん



志野を本格的に始めた切っ掛けは、1年前に赤いネズミ志野を焼きたいと思ったことです。実験の進展に伴い緋色も赤の鼠志野も同じ焼き方で出来ることが判ってきました。鼠志野や緋色を実験する中で、予想しなかった色や焼き上がりの鼠志野や、紫色の志野、ピンク色の志野、カイラギの出る志野、ピンホールが出る志野が、土や化粧土や長石の色々な組み合わせで出来ることも分かって来ました。

当初はマトリックスを組んで片端からグイ呑みのサンプルを作ってテストしていました。購入した原材料代の総額が新しい窯が買えるほどの高額になってしまったので数十種類のサンプルを作ったところで止めました。

「志野を焼く」 山村隆

○山村さんから「志野焼」
 についての投稿をいただきました。
 全文紹介いたします。



これらを使って3回ほど実験焼成しましたが、この3回の窯に入れた小服のテスト用茶碗の中から幾つか選び、中間報告として「志野のテスト各種」として今回出品しました。

志野の窯焚きは通常の還元焼成とは異なり、焼きながら温度を下げるという特別な焚き方が必要です。

作家さんは一子相伝とまでは言わないまでも、積極的に焼成方法を他人に言うことはありません。自分と同じ作品を作られては造形でしかオリジナリティが出せなくなってしまうから・・・いわば企業秘密なのです。

そんな中で今までの経験と掻き集めた断片的情報を総動員してようやく今回の焼成方法に辿り着きました。

原材料も同じ理由で門外不出ですので、私は前述の大量の実験によって見つけた伝統的な自然の原材料を購入して組み合わせ使っています。そんな訳で原材料については今のところオープンできません。

最近はお葉や発色原料についてはそんなこととして志野と言えるの？と思える作品もありますが、まあ桃山志野ならぬ「平成志野」というのもアリかなと思っています。桃山の窯焚きも白い肌を出すためなら何でもやっただけというのが本当のところでしょう。私も次はやってみようかと思っていますが・・・。

緋色を出すには、焼き方の工夫の他に土や長石を選ぶ必要があります。市販の土や長石の中には緋色の出ないものや高温でないと溶

陶陶さん

第 91 号

あかほし



けない長石も多数あります。
 実際の窯焚きにおいては、温度計は目安にしかなりません。同じ温度でも窯によって焼け方に違いがあります。窯焚きは色見で最適なタイミングを計りステップを進めなければなりません。温度とえば、志野は高温で強還元して焼くというイメージが何時からか定着していますが、高温で焼くと緋色が出にくくなるし、もぐさ土と言えども焼き締まり、独特の柔らかい風情がなくなります。カイラギやピンホールも溶けて消えてしまいます。また強還元すると焦げが強くなり緋色が汚くなります。出来るだけ 1200℃ 以下で溶ける長石を探すことが肝要です。

志野の窯焚きでは緋色を出す段階でガス中毒や酸欠による死亡事故にならないよう注意深く進める必要があります。実際には原材料の選定や窯焚きに色々と細かい知見も必要ですが、志野の窯を焚くには普通のガス窯や灯油窯で十分です。ただ色見や引き出しの出来

る所謂色見穴があるものの方が失敗少なく焚くことができます。何しろ志野の窯焚きは徹夜の仕事になるので失敗は避けたいところです。

穴窯も焼き締めと一緒だと焼き方が違うし灰被りを防ぐためサヤが必要で、薪で焚く意味があまり感じられません。電気の窯も積極的酸化雰囲気を作れないので残念ながら綺麗な緋色が出る志野は期待できないです。

最後に、陶工房では門下生は何時でも志野を造れますが、志野に興味をお持ちの方で自分では焼けないが造ってみたいという方々には制作実習体験も可能です。窯焚きや原料の組み合わせについては一部の門下生にのみ実習させています。

今回出品した志野の写真と制作実習体験等については、ブログを参照下さい。

※検索↓ゆめが丘陶芸教室↓志野の窯焚きの中間紹介

ホームページもチェック!!

横浜陶芸友の会

検索

<http://www20.atpages.jp/tomonokai/>

横浜陶芸友の会だより 第 169 号

(平成 29 年 11 月 1 日発行)
 発行人 横浜陶芸友の会
 会長 高橋 光男

編集責任者 広報部長 吉良謙

【編集後記】

●今回山村さんから志野焼の詳しい実験データやノウハウの貴重な原稿をお寄せ頂きました。友の会の皆さんには、この知見に触発されて、作陶に発奮なさる事とおもいます。

●中野正好さんは「公募展」に連続入選され、会の身近な仲間の活躍は嬉しいものです。

※HPを御覧ください。

●新春の作品展に素晴らしい作品が寄せられる事をお待ちしています。 季楽軒

●「第38回作品展」出展者全員の写真と短い紹介文を3回に分け掲載いたしました。会期中にお会いできなかった方やお話が聞けなかった方には大変申し訳ありませんでした。

●「第39回作品展」ではもう少し、「この一品」にこだわってお話を伺い、皆様に会報で紹介していきたいと思えます。

●友の会HPの「会員ページ」には皆様の力作が見やすく掲載されています。 鍋島弘義